

明智秀満美談

うたがわよしとら おおつきかもとじょう らくじょうのず
歌川芳虎画 「大津坂本城落城之図」(草津市蔵・中神コレクション)



江戸時代から明治時代にかけて制作された浮世絵には、歴史や軍記物に登場する武将や合戦の場面なども描かれました。こちらの浮世絵に描かれているのは、天正10年(1582)の坂本城落城直前の様子です。

坂本城は織田信長の重臣・明智光秀の城でしたが、光秀が本能寺の変で信長を討ち、山崎の戦いで織田軍の羽柴秀吉に敗れたため、坂本城は秀吉軍の堀秀政(ほりひでまさ)に攻められて落城します。その際、城には光秀の娘婿である明智秀満(ひでみつ)が駆けつけており、元和(げんな)頃(1615~1624)に書かれた秀吉に関する記録『川角太閤記(かわすみたいこうき)』によると、秀満は城にあった刀や脇差などの宝物数点を、「こ

れらは天下の名品であるから、落城とともに失われるべきではない」と夜具に包んで天守から落とし、敵である堀軍に託したといえます。

この絵では右側・広間の上座中央に秀満、左側の縁上に堀秀政が描かれ、両者が広間で対峙していることや、絵左上にある宝物の数が多いことなどから『川角太閤記』の記録とは異なります。どうやら引き渡す前に宝物を披露している様子を描いたと考えられ、この後堀軍はこれらを携えて城を出るものと思われます。秀満は城に火をかけ自害しますが、天下の名品である宝物を敵方に託してこの世に留めおくという決断は美談として後世に伝わり、このように浮世絵にも描かれ称賛されたのです。

(令和2年9月・草津宿街道交流館学芸員 武富みゆき)